

◎中学生の部

その他の良い作品

夏を運ぶ風

東中学校 二年

井上 優衣

夏の朝、家のまわりはどこまでも田んぼ
風がゆらす稲の葉は
ざわざわとみんな歌い出す
広い空、ゆっくり流れる雲
土の道を歩くと
足元から小さなカエルがとび出す
遠くでひびくトラクター
土と草のにおいが風にのる
朝日に照らされた稲の葉が
きらきらと光って宝石みたいだ
昼になると
田んぼの向こうから
セミの声がいつせいにひびく
その声は夏の太陽みたいに元気だ

風が吹くたび
稲の海がゆらゆらと波打ち
まるで大地が呼吸しているみたいだ
夕方、空はオレンジ色に染まり
稲の影が長くのびていく
ひぐらしの声が
一日の終わりを告げる
遠くでひびく花火の音
夜の訪れを感じる
その音もまた
ふるさとの夏の思い出だ
家に帰れば
母のつくる夕ごはんのにおい
おなかぐうつと鳴る
笑った日も、泣いた日も
全部この景色の中に残っている
稲の波も、広い空も、やさしい風も
ずっと私の心に残っている

ふるさとの手のひら

南中学校 一年

大谷 絢香

大きな空と まっすぐな道
自転車こいで 風を切る
笑いながら 友と話した
あの道は 今も好き
利根川の土手に 腰をおろして
お弁当を開いた 家族の笑顔
川の音と 草のにおい
あの日の景色が胸に残る
夏祭りのにぎわいの中
提灯の灯りに 照らされ
輝いていた 人々の笑顔
その笑顔が 羽生をつくっている
羽生の町は にぎやかで
だけど どこかやさしい音がする
学校 公園 商店街
どこにいても 人の声が近い
楽しいことばかりじゃなくて
泣いた日だって あったけど
そばにいたのは 家族と友達

ふるさとは そういう場所なんだ
景色より 思い出より
一番残るのは 人のぬくもり
羽生で出会った つながりが
私の心を 支えてくれる
ここで生まれた 奇跡の日々
これから先も 忘れない
ふるさとの手ひらに 私は包まれている

おばあちゃんと僕

南中学校 一年

角田 力飛

おばあちゃんと僕は

誕生日が一緒だ

元号は違うけれど

同じ二十四年九月九日

僕が産まれた日

今までで一番嬉しいプレゼントだと言って

泣いて喜んでくれたそうだ

何かラッキーなことが起こると

「おばあちゃんのおかげだね」

とお父さんとお母さんは言う

だんだんラッキーなことが増えていくと

おばあちゃんが見守ってくれていると実感し

心強くなる

そして僕は自信を持ち

また新たなことにチャレンジしたくなる

野球の試合前は

必ずおばあちゃんにお願いする

「良いピッチングが出来ますように」

そのおかげで

僕は落ち着いて投げることが出来る

試合でピンチになると

空を見上げておばあちゃんにパワーをもらおう

僕は決してマウンド上で孤独ではない

いつもおばあちゃんが

見守ってくれているから

そして今日も

僕はマウンドに立つ

この音色を届けるために

東中学校 一年

小坂橋 ほのか

沈黙だった器楽室に
どんだんとすてきな色が重なっていく―
私は吹奏楽部に入っている
まだ入ったばかりの時は
自分の音に自信が無かった
本当にこの音でいいのか
不安だった
だけどある日気づいたのだ
私が入ると音が
少し 本当に少しだけれど
変わっていくことに
まるで絵の具のパレットのように
みんなそれぞれ色がうけけれど
それぞれすてきな色が
混じり合って
きれいな色を作る
いらぬ色なんてないし
息が合っていないかったら
すてきな色はできない

それってすごくむずかしいけれど
とてもすてきな色だなんて思ってた
それからちよつとだけ
自分の音に自信が持てるようになった
吹奏楽ってとてもすてきな色だ
だから私が感じた色を見てほしい
この音色を届けたい
だから私は今日も
どんな色が見えるかなとわくわくしながら
器楽室に向かう

三田ヶ谷小の廃校と光

東中学校 一年

高 渕 遥斗

令和七年三月三十一日
ぼくが通っていた三田ヶ谷小が
ひっそりと閉校を迎えた
ぼくは三田ヶ谷小最後の卒業生
卒業の喜びと閉校のさびしさがあった

時が経つのは早く
校庭は草がいつぱい
笑い声のない静まりかえった場所になって
いた
思い出すのは
毎日通った通学路
みんなと勉強した教室
思いつきり遊んだグラウンド
すべてがぼくにとって大切な思い出だ
学校がなくなってしまうても
ぼくらの思い出は

ずっとぼくの心に残っている
目を閉じれば
三田ヶ谷小の思い出が
ずっとぼくの心にあふれている
さようなら、三田ヶ谷小学校
ありがとう、三田ヶ谷小学校
三田ヶ谷小からの光は
ぼくらの足元をずっと照らしているよ

迎え盆

東中学校 二年

中田 權斗

八月十三日は朝から母の実家へ行き、
仏様を迎える準備をする。
位牌、線香を立て、おりんをきれいにし
花、ほおずき、笹竹も飾った。
伯父やいとこ達と仏様を迎えに行く。
久しぶりに話すいとこ達。
なんだか照れくさいが心地よい時間だ。
家に戻り、ちようちんのろうそくで
線香をあげ、たつぷりの水を供える。
母はいつもより時間をかけ線香を
あげている。
ご先祖様に近況報告をしているようだ。
食事は、ごはん、なすのみそ汁
かぼちやの煮物、そうめん、冷や汁
きなこのぼたもち
箸も忘れずに用意する。
僕が小さい頃は、ひいばあちゃんが
主となって仏様を迎えていた。
今は伯父、そしていつかはいとこの

役目となるのだろう。
きちんと教えてもらおうわけでもなく
マニユアルがあるわけでもない。
毎年毎年一緒に経験して覚えてゆき
次の世代に伝えていく。
「仏様、いつも私達を見守ってくれて
ありがとうございます。
ゆつくりしていつてくださいます。」
と手を合わせた。

心を一つに

西中学校 三年

村田 莉那

緊張するね
がんばろうね
今年もこの日がやってきた
心を一つに歌うこの日が
二度目の合唱コンクール
今年も私は指揮台に立つ
一度だけ言われたあの言葉
「指揮者って楽しそうだよね」
心にグサッと何かが刺さった
全然楽しやない
だって一人なんだもん
強弱とかイメージとか
私が見んなに伝えないと
良い合唱はつくれない
そんなふうな心の中で
反抗していたけれど
口には出さず
無理やり気持ちを飲み込んだ
そんなことを思い出しながら

出番を待っていた
速鳴る鼓動
指揮台に上がり
演奏が始まった
緊張で頭が真っ白になりそうだったけれど
みんなと目が合うと
自然と勇気をもらえた
もう怖くない
一人じゃないから
最後のフレーズを歌い終え
席へと戻る
運命の結果発表
最優秀賞をとった
理解するのに数秒かかった
跳びはねそうなくらい嬉しかった
みんなありがとう
この経験を胸に
これから私を精進していく

ふるさとを照らす光

東中学校 三年

恵
蘭

石の鳥居の向こうから
小さなお社と、背の高い森林が顔を出す
錆びついたブランコは
誰に使われるわけでもなく
ただこちらを見つめて
静けさに呑み込まれてしま
目の前のコンビニの看板も
交差点を歩き交う車も
工事中の橋も
何一つ変わらない日常な
「そこ」だけが
ガラスに覆われたかのよう
深い眠りに落ちている
まるで異世界だ

近所の神社
「そこ」には、とある神が祀
天照大御神、太陽の神様だ

武士の時代に建てられた
形を変えることなく
現代の街に居座っている
月日が流れ、時代はぐる
きつと、この街の移り変
全てその目で見えてきた
そして、太陽の神様は
私たちのふるさとを
そつと見守り、明るく照
私は、自分のふるさとが
数百年の歴史のバトン
未来へ渡すために
そして何より
太陽に照らされた街並
いつまでも絶えぬよう
この神社を、ふるさと
守り続けたい

ふるさとの夕鐘

南中学校 三年

柳沢 理名

あの頃のわたしは
いつも公園で走り回ってた
すべり台のてっぺんから
友だちと笑いながら
遠くの景色を見て

ブランコを思いきりこいで
空に届くんじゃないかって
本気で思ってた

地面にチョークで絵を描いて
木陰でだれかが作った泥団子を見つけて
「上手だね」って言い合ってた

ふるさとの夕鐘が鳴るころ
「また明日も遊ぼうね」って
泥まみれのまま手を振って帰った
今のわたしは
あの頃より少し大きくなったけれど

ふるさとの夕鐘が聞こえるとき
過ぎ去った日々が静かに息づき
胸の奥に温かな光が灯る

あの頃のわたしが見上げた空へ
いつか届く日は来なくても
この鐘の音がある限り
わたしは何度でも
あの頃のわたしに会える気がする

仲間とともに、頑張るぞ

南中学校 一年

渡邊 陽輝

久しぶりに小学校のそばの公園で遊んだとき、ふと小学校での生活を思い出した。登校時に中学生とすれ違う度に、僕も早く制服を着たいな、中学校ではどんな勉強をするのだろうと思いつかべていた。

格好いい制服を着た中学生は輝いて見えた。今、僕はあの頃に憧れていた中学生だ。

最初は初めて会う友達や難しい授業、部活など慣れないことばかりで緊張と不安だらけだった。

今は登校すると小学校の頃からの友達に加えて新しい仲間や先生、先輩がいる。

バレー部の大会では暑い体育館の中で真剣な表情で頑張る先輩の姿がキラキラと輝いていた。

僕ももつとたくさん練習して、いつか大会に出たいと思った。

大会が終わり、いつも優しく指導してくれた三年生の先輩が引退してしまった。

寂しい気持ちはあるけれど、これからは先
生と二年生の先輩と僕たち一年生の仲間と、
新たな気持ちで頑張るぞ。